

# ビオトープ・イタンキ通信 第10号

NPO法人 ビオトープ・イタンキ in 室蘭 2017年7月1日

「ビオトープ・イタンキ in 室蘭」が発足して今年で15年になります。「ホテル再び、人にやさしい街・室蘭」を合い言葉に進めてきましたが、出発の時の強い志と、それに賛同したたくさんの方たちの協力と働きかけによって、このビオトープが作られ、ここまで育てられてきました。

今号は、15周年記念号として、始まりの頃の思いを先輩の方々に書いていただきました。その思いをつないでいく道しるべとしたいと思います。

## ◆ビオトープに集う子ども達

2007年秋から始まった絵鞆小4年生の「自然再発見バス・ツアー」の出発を前に講師の私は子ども達に「実は50年前、この学校の先生だった」と明かす。「ええ・・・そうなの？」と驚きの声。バスはマスイチ浜、地球岬へ。10時過ぎイタンキ浜に。まずは海浜植物の案内看板で学習。その後、潮風を受けながら、大西さんらの待つビオトープへ。草原にはたも網、水槽が並べられている。大西さんはビオトープの歩みを話す。

池にはヨシ、ガマ、藻が揺れている。その上をアキアカネ、オニヤンマ等が繋がって飛び廻る。池に先に入るのは女の子。素手でアマガエルをつかむ。「わぁー」と歓声。子ども達は手や足、たも網で水中を探る。獲物は「ドジョウ、ゲンゴロウ、ヤゴ、ミズカマキリ、小魚のトミヨ」。それらは大型水槽に入れられ、大西さんの「生態ガイド」が始まる。更に自然の豊かさ、神秘さ、命を繋ぐ生き物の四季を語る。

わずか2時間あまりの時間、ビオトープの体験は子ども達に「野生」を呼び起こす。テレビやスマホゲームに時間を奪われている子ども達にとって、ビオトープは子ども達を夢中にさせる力があるのでしょう。残念ながらこのバス・ツアーは絵鞆小閉校のため2013年で終わった。

この年の夏、紙芝居・スライド作品の上映会があった。「イタンキ浜夏物語～命輝く水辺・砂の墓標」に二部作である。前半の脚本作りでは大西さんが細かいところまで教えてくれた。

上映会后、大西さんのトークと映像、鳴り砂の会の方が実演。ホテル内にキューキューと鳴く音。百五十人あまりの市民の表情が和んだ。寄せられたアンケートにはビオトープの素晴らしさ、イタンキ浜の風土と歴史の深さを知ったと書かれていた。(室蘭子どもと環境・平和を創る会 代表 三浦幸夫)



絵鞆小の体験学習

## ◆大西さん(ビオトープ)とのかかわり

退職まであと何年となった頃、大西さんが私の勤務先に来てお目にかかったのが始まりです。

最初から熱心にイタンキ浜の公園に昔の自然を復元したいとお話しをしていましたが、既設の公園に作ること自体が無理であるとの返事をしていました。「でもどうしてそうなの？」とくと私の方は規定概念で答えながらも「今環境問題が全国的に話題になっているのでもう少し待っていたら」なんて言っていました、そういう問題でないと・・・。

そんな中、大西さんはどうすればの思いを抱きながら周辺の方々に自然復元のことを詳細に説明していったと思えます。その後、市議会で度々、現代に失った自然保護・自然再生の必要性を訴え、議論されてきて、私自身もビオトープが「生物の生息する空間」との説明もどう理解すれば良いのかわからないまま退職しました。

それから大西さんの店舗に度々顔を出して、その後の状況が無責任に聞きながらも「今、日本の各企業が環境保全などで補助をする」との話をしたりしていましたが、逆に「ビオトープ・イタンキの会」に誘われ、後ろめたさもあり参加しました。企業の助成金にはその後色々恩恵を受け、組織を法人化に向けての名称の「ビオトープ・イタンキ in 室蘭」の決定にも加わったことが思い出されます。その後はビオトープの造成と進み、現地での最初の体験は苗木の育成と植樹でした。(及川賢一)